

夕方一時間の散歩から戻ってくると家の回りがずいぶん暗くなっているように感じた。もうすぐ十二月だ。日が沈み始めると急に暗くなる。曇っているとなおさらのことだ。それに寒さが加わるとさらに暗く感じる。

哲司はコートの襟を立てようとして手が空振りした。コートは着てなかった。着て出ようか迷って結局着なかったのだ。どこかに脱ぎ忘れたのかなと一瞬あせったがすぐに勘違いだと気づいた。

「ごめんなさいね、余計なこと頼んだりして」

妻の咲江が玄関まで飛び出してきた。あまりに笑顔で飛び出してきたのでさらにあせった。笑顔で迎えられる理由が思い当たらない。

「あるあると思うってたんだけど切らしてたのよ。あしたほら、あれがあるでしょう。お茶の用意も出来てなかったら恥ずかしいから」

そう言って咲江はやはり笑っている。

しばらく顔を見合わせて哲司が何も反応しないので咲江は真顔になった。

「忘れたのね」

「何をだ」

哲司の方がもっと真顔になった。

「何を使っていつも使ってるやつを買ってきてって頼んだでしょ」

「いつも使ってるやつって」

「いやあねえ。お茶よ、お茶。歳幸堂のお茶っ葉」

記憶がない。咲江は出かける前に頼んだと言っているが聞いた覚えがない。だから忘れたのねと言われてもピンと来ない。まあ何か考え事をしていて頭の中に入ってこなかったんだろうとこの時は気に病むこともなかったが、それから同じような物忘れが数回続いた。

町内の告別式に行ったことを忘れた。激辛カレーを食べて下痢したことを忘れた。自転車泥棒と間違えられて交番へ連れて行かれたことも忘れた。

決まって数日前のことを忘れるのだ。咲江に指摘されて必死に思い出そうとするのだが思い出せない。思い出すきっかけすら浮かんでこない。

初めのうちは笑ってすませていた咲江も次第に不思議がるようになり、大丈夫？ 聞いてくるようになった。

「忘れっぽくなったかな」

「なったわよ、かなり」

「ああ」

「本当に大丈夫なの」

「大丈夫大丈夫」

「そうよね、特に疲れることなくしてないものね」

その通りだった。今年の三月で仕事を辞めた。六十歳を超えて急に体がきつくなった。再雇用の話も断った。四十年近く勤め上げた仕事に未練はなく、金に困っているわけでもなかったのですばつと辞めた。ひとり息子の誠二が昨年結婚して家を出たこともあって、これ以上がんばる必要もなかった。数日前の記憶が飛ぶようになったのはそれからだった。勤めている時もありえなかった。

物忘れもいじやないか。

口には出さなかったがそう思っていた。しかしそうもいかなかった。

咲江が怒り出したのだ。仕事を辞めてすぐにぼけるなんて教科書通りだわ。赤ちゃん返りしないでね。趣味のない人はだめなんだって。あたしが先にぼけたいわ。

どこまで本気なのか分からなかったが癩にさわる。全く大目に見てくれない。

ならば、と哲司は考えた。ひと芝居打ってやろう。わざと忘れたふりをして咲江をかついでやろう。怒らせるだけ怒らせて、いやいやちよつとふざけてみたんだ。あっかんべーとやってやる。

ちようどいい種があった。咲江の誕生日だ。これまでそれらしいイベントをしてこなかったので意表をつけてプレゼントを用意しよう。イタリア料理のフルコースを予約してワインを飲みながらおもむろにプレゼントを取り出す。

「長年ありがとう。咲江のおかげでここまでやってこれた。感謝してるよ。これはその気持ちだ。受けとってくれ」

「え？ なに？」

「これからもよろしく」

「え？ なんなの」

「だから感謝の気持ちなんだ。これ以上言わせるなよ。照れるじゃないか」

「あなた本気なの」

「本気も本気。大真面目だ」

「見ていいかしら」

「どうぞどうぞ」

「きゃー、これをあたしに？」

「俺の気持だ」

「でもどうして」

「いいじゃないか」

ばかげた話だが半分は本気だ。思うように仕事をやってこれたのも咲江が我慢してくれただからだ。急な出張で家族旅行がキャンセルになったこともある。車の買い替えは相談せず勝手に決めた。昇進試験はことごとく落ちた。そんな時でも咲江は文句を言わなかった。笑って済ませてくれた。自分は自分でいつのまにかスーパールのパートを始めたし、パッチワ

ークやドライフラワーの教室に通っていた。咲江もそれなりに楽しんでいるようだった。ええっと、咲江の好みはなんだったけな。

急に現実に戻った。誕生日のサプライズが思い浮かばない。不似合いなことを無理にやろうとしているからだ。めんどうくさくなったのですぐに考えるのを止めた。

そうこうしているうちに誕生日の三日前になった。リビングでくつろいでいる咲江に向かって、ちよつと豪華にイタリア料理を食べに行こうと誘った。どんな反応をするだろうと期待したが、別に驚くわけでもなく「それもいいわね」とあっさり受け入れたので拍子抜けしてしまった。そして不安にもなった。

咲江は信じていないかもしれない。どうせ当日になってそんな約束したっけなと言いついに決まっている。イタリア料理なんて嘘だ。店の一軒も知らないくせに。そう思っているに違いない。

哲司は自分の言ったことをメモに残して財布の中に入れておいた。当日はいったん忘れてふりをするのだ。咲江は怒るだろう。はじめからこうなると思っていたわと嫌味を言うだろう。激しく食器をぶつけながら食事の用意を始めるだろう。洗濯物は畳まないだろう。もったいないと言って部屋の暖房を切ってしまうだろう。それでいい。咲江の背中が痙攣し出したところでおもむろに種明かしをする。安心してくれ、ちゃんと予約してあるんだ。ワインも注文してある。三ツ星レストランだ。特別室だ。ひっひっひっ。

哲司はにやけていた。万事自分の思い通りに進むことを疑わなかった。

十二月二日、日曜日。今日で咲江も還暦を迎えた。それは間違いなかった。いい天気になりやがったな。

哲司はにやけた。夕方の散歩を早めに切り上げて家へ戻った。さあこれから芝居を始めるぞ。三日前に約束したレストランでの食事を忘れた振りをするのだ。完全に忘れた振りをする。記憶のかげりもない。だからレストランも予約していないということに。

咲江はあきれ果てるだろう。そういうこともあると思っちゃんと言いつきはんの用意は出来てるのふくれっ面のまま背を向けてキッチンに立つ。背中がいきり立っている。

そこで言うのだ。

「はははは、こつちこそちゃんと言いつきが出来てるんだ。一丁かっいでやったんだよ。さあ行こう。六時スタートだ」

そんなことを想像しながら哲司は玄関でゆつくり靴を脱いだ。すると家の中から咲江が出てきた。出迎えるなんてめずらしいな。

そう思ったら咲江は慌てて靴を履いて家を出ようとする。

「おい、どこ行くんだ」

哲司は声をかけた。

「お買いものよ。白菜切らしてたの忘れてたのよ。いやあねえ全く、あなたのこと笑えないわ」
「白菜？」

「今晚はお鍋でしょ。白菜がなかったら格好がつかないわ」

「鍋なのか」

「鍋なのかって。あなたがお鍋にしてくれて言ったんじゃないの」

哲司が戸惑っているうちに咲江はさっさと家を出て行った。今日は早かったのねと言いつつ残して。

鍋にしてくれと言った覚えはなかった。レストランに行くことになっている。三日前にちゃんと咲江に伝えた。メモも残してある。今日はイタリア料理だ。

すぐに咲江は戻ってきた。二分の一の白菜だけを買ってきた。二分の一でも食べきれないから今週もう一度お鍋にするわと言っている。

さっそくキッチンに向かって背中を見せた。いきり立っていない。いつも通りの背中だ。

忘れたのか？ 今日はレストランだ。おまえの誕生日だ。

哲司はあせった。しかしこちらからレストランの話を持ち出すわけにはいかなかった。全く記憶がないということにして、咲江をかつごうとしているのだ。

キッチンに具材が並べられた。白菜、しめじ、豆腐、小松菜、春雨、たら、サーモン、牡蠣一袋。蛇口から勢いよく水が流れ落ちる。まな板に白菜が乗る。包丁が下りる。

ざくつ、ざくつ、ざくつ。

おい、と哲司は呼びかけた。

咲江は振り返った。

「あら、そんなところに立ってどうしたの。手伝ってくれるのね。だったらテーブル拭いてコンロの用意をしてちょうだい。コンロの下にマット敷くのをお忘れなでね。それが終わったらお豆腐切ってちょうだい。お出汁が浸み込む程度の大きさにね。たてたててよこぐらいでいいと思うわ」

咲江に全く迷いはなかった。鍋の用意に突き進んでいる。

「おい」

哲司はもう一度声をかけた。鍋よりイタリア料理だ。

「誕生日おめでとう」

苦し紛れに口にした。シナリオが狂っている。どろどろと溶けだした時間を自分の都合に変えなければならなかった。

「咲江もとうとう還暦になったんだ。早いもんだなあ」

「何言ってるの。同じ年じゃないの」

「お互い年を取ったなあ。早いもんだなあ」

何を喋っているのか分からなかった。ただ喋らなければならなかった。咲江から何のアクションもなければイタリア料理は食べられない。

「悪かった悪かった。ひと芝居打ったんだよ。ちゃんと覚えてるさ。レストランを予約してるんだ。最近俺のことを物忘れの激しいおっさんみたいに思ってるようだからわざと忘れた振りをして驚かせようと思ったんだ。ごめんごめん。もう少し早くばらしておけばよかったかな」

ざくつざくつと白菜は刻まれていく。咲江は振り向かない。背中が痙攣し始めた。

紅葉は完全に終わった。咲江と一緒にどこかへ見に行けばよかったかなと思う。近くの運動公園でも十分楽しめるのだが、仕事を辞めて時間はあるのだからたつぷり晩秋の彩りを味わうのもよかった。でも実行できなかった。咲江の様子がおかしいからだ。

誕生日の一件から咲江は神経質になった。完全に俺を疑っている。話しかけても適当な相づちですぐ会話を切ろうとするし、やたらとメモ書きしてテーブルの上に並べている。俺に見せようとしているのだ。たいしたことは書かれてない。焼きそば、シチュー、焼きそば、シチュー。喪中三枚。トイレの電気消すこと。インフルエンザ予防接種。三日前にくしゃみ。起きて来ない。くしゃみはウソ。食欲あり。食べる食べる。三日前のことは全部ウソ。

あてつけがましい日記のようだ。嘘つきにされてしまった。

しかし哲司は反論しなかった。下手に反論すると墓穴を掘るばかりだ。そもそもほとんど思い当たることはないのだから反論のしようがない。風邪気味だから食事はいらなんて誰が言ったんだ。くしゃみはしたかもしれない。くしゃみぐらいするだろう。

例年よりも早く初雪が降ってじーんと寒い日だった。ポストに一枚の名刺が放り込まれていた。

中村忠雄。

実際は名刺サイズの厚紙に中村忠雄とボールペンで書きさされているだけだった。裏書きもない。

「あら、ひよっとして忠雄君じゃないの」

しばらくそれをながめていた咲江が思い出したように言った。

忠雄君、忠雄君。

哲司の頭の中は動かなかった。ただおうむ返しに繰り返しているだけだった。

「ほら、小中で同級生だった忠雄君よ。いたずら好きで人気者で足が速くて、逃げ足ってあだ名が付いていたわ」

逃げ足、逃げ足。

哲司はまったく思い出せなかった。頭の中が冷たくなっていった。

思い出そうと思っただけ押し入れの中から分厚い卒業アルバムを引っ張り出してきた。

卒業アルバムを開くのは何十年ぶりだろう。小学校の方は最初に校舎の全景写真がありその次が校長先生、その次が教頭ふたり、それから全教諭の集合写真、六年のクラス写真と続いていた。六年二組の自分たちふたりはすぐに分かった。ふたりとも面影がある。いかにも子供っぽい顔でまじめに写っている。しかしその他のクラスメイトは誰一人として分からなかった。担任の先生の顔も忘れていた。卒業してからも付き合いがあったのは咲江だけだった。大きな紡績工場の閉鎖やその後の再開発のために生徒の移動が激しくて中学に入るとがらっと顔ぶれが変わった。一度も同窓会は開かれていない。

不意に咲江の手が伸びてきてひとりの生徒を指さした。みんな前を向いているのにそいつだけ斜め向いて写っている。

「忠雄君よ」

「……」

「忠雄君」

「……」

「いつも一緒に帰ってたじゃないの」

「……」

中学校の卒業アルバムも開いてみたが、中学では同じクラスにならなかったので見つけるのに苦労した。十クラスもある。最初は一組から順に顔で探していたが咲江も自信なさそうだったので写真の下の名前で当たった。

中村忠雄はここでも斜めに写っていた。学生服の第一ボタンがはずれている。不良っぽいのではなく、わざとだらしなくして気取っている感じだ。どこか照れくさそうでもある。それでも賢そうな顔をしている。咲江の記憶では学年で十番以内に入っていたらしい。運動神経もよく、リレーやマラソンで表彰されていた。逃げ足というあだ名はもうなかったようだ。

五十年前の記憶はけっこう生きていた。特に小学校のことはよく覚えていた。校庭の隅にあった緑の池。湿地に生息する動植物の観察が目的だったが手入れがなされてなかったので草が覆い茂って怖い場所でもあった。校舎とランチルムをつなぐ渡りローカも怖かった。ここで足を滑らせたら地獄に落ちるといわれていたのでみんなそこだけゆっくり歩いた。

「忠雄君ったらね」

咲江が楽しそうに言う。逃げ足の忠雄だけはうれしがって何回も何回も勢いよく往復していたというのだ。

最後まで中村忠雄は思い出せなかったが、名刺のおかげで久しぶりに咲江と昔話ができる。最後は校歌を歌ってお開きとなった。

家中の網戸をはずして年末の大掃除に取り掛かっていた。仕事を辞めたので今年は自由に日を選ぶことができた。日の当たるところにいとセーターを脱ぎたくなるぐらいの陽気だったが、実際脱いでみるとやはり寒かった。二階の窓拭きが終わったら急いで年賀状を書こうと思った時だった。玄関のチャイムが鳴ってしばらくすると話し声が聞こえてきた。何を喋っているのかは分からなかったが気配は漂ってくる。そのうちもぞもぞとした声ははっきりしてきた。

——やっぱりねえー、——そうよねえー、——あなた、あなた——

咲江に呼ばれて玄関まで下りていくと背の高い男が立っていた。口を大きく開いて笑っているところだった。目を細めている。体が斜めに向いている。

「どちらさまですか」

哲司が声をかけるとその男はさらに大きく口を開けた。

「あなたやっぱり分らないのね」

咲江も大きく口を開けて笑う。

中村忠雄。

人づてに聞いたという住所をたよりにやってきた中村忠雄は久しぶりに顔を見たくなくなったんだと親しげに話しかけてくる。幼いころの面影はない。

ただ体を斜めにしてなにやら照れくさそうにしているので、その一点だけで哲司はこの男を受け入

れた。

「逃げ足だよ。思い出してくれたか」

忠雄はますます体を斜めにして一歩近づいてきた。哲司はとっさに思い出したふりをした。

「おうおう」「えっほんとに?」「でもどうして」「久しぶりじゃないか」

忠雄は若々しかった。髪の毛はふさふさしていたし白髪も生えてなかった。肌のつやもよく、中年太りもしてなかった。とっくりセーターの上から薄手のジャケットをはおり、スリムなジーンズにトレッキングシューズ。肌寒い中でも軽装が似合っていた。

哲司は思い出せないまま忠雄の前に突っ立っていた。

咲江が興奮したように言う。

「最近この人、物忘れが激しくて困ってるのよ」

忠雄は笑って答える。

「俺もだよ。そういうのって仕事を辞めたとたんに来るんだよな」

「忠雄君ね、外国行って日本語教えるんですって」

「そうなんだ。定年後のことも考えて日本語学校に通ってたんだ。おかげさまで資格をもらえたんでタイかフィリピンに行って教えようと思ってさ」

「奥さんも一緒に行くんですって」

「俺一人じゃ心配らしい。まあちょっと英語ができるんで通訳代わりにでもなってくれたら十分だよ」

聞こえてくるのは咲江と忠雄の会話だった。ふたりの間で盛り上がっているようだ。哲司は口をさめなかった。下手にしゃべると思い出した振りがばれてしまう。

びくびくしていると忠雄の方から、

「外国へ行く前にゆっくり温泉にでも浸かっておこうかなと思うんだ。女房とふたりだけじゃつまらないから仲間を探してたんだよ。すぐにOKしてくれるとは思ってなかったな。今日はちょっと寄っただけだから。思い出してくれてありがとう。詳細は後ほど。じゃあな」

そう言ってさっさと帰って行った。

哲司はなんだか分からないままうなずいていた。となりで咲江もうなずいていた。

「東南アジアで日本語教師か。なかなかやるじゃないか」

哲司がそうつぶやくと咲江も同意した。

玄関先で立ち話をしたものだから体が冷えてきた。

哲司はそれから窓拭きの続きをして年賀状を書き始めた。

今年の三月で退職いたしました。

一筆添えるたびに来年は随分減るだろうなと思った。

咲江が旅行カバンに荷物を詰め込んでいる。タオル、下着、靴下、歯ブラシ、洗面器、割り箸、ストロー、スリッパ、寝間着、ティッシュペーパー。膨らんだカバンをぐいぐい押し込んでジッパーを引く。

何してるんだと聞いてもふふふと笑うだけなので哲司はそれをながめるばかりだった。

——旅行へ行くんだったかなー。

そんな予定はなかった。

——家出でもするのか。

思っただけで笑えてきた。

——気の迷い。

そうだ、気の迷いだ。何かいらつくことがあってそれを解消しようとしてるんだ。旅支度でストレス解消。でも咲江はそんなやつだったか。長年連れ添った仲だ。今さら気持ちを確認するのも照れくさいものだ。

年の瀬が迫っていた。水屋の整理も終えたし押し入れの掃除も終わった。仏壇のおみがきも済んだ。働いていたところに比べるとかなり時間の余裕があったので手持無沙汰になるくらいだった。おせち料理の準備でも手伝おうかなと思ったが、段取りが狂うからいらないと咲江に断られた。

「散歩に行ってくる」

そう声をかけて家を出ようとした時、不意に息子の誠二が勢いよく飛び込んできた。

「おやじ、大丈夫か」

びっくりしたような顔をしている。

哲司もびっくりした。遠方で新婚生活を始めたばかりの誠二が突然やってきた。何の連絡もなしに。しかも手ぶらだ。

「ひとりで外へ出て大丈夫なのか」

そう言って哲司の前に立ちはだかる。

まずまず哲司はびっくりした。

家の中から咲江が出てきたが、咲江は誠二を見ても特に驚かなかった。ちようどいいわ、ふたりで散歩でもしてきたらと勧めてまた家の中へ引っ込んでいった。

この時咲江と誠二の間で何か重要なやりとりがなされたような気がした。自分がのけものにされているような感じだ。しかしそれはほんの一瞬のことだったので哲司は深く考えなかった。

誠二とふたりで歩くなんて久しぶりだった。久しぶりどころか記憶にないくらいだ。幼い頃からべたべたする関係ではなかった。手のかかる子供ではなかった。反抗期もなかったし相談事もなかった。激しく叱ったこともなければ思い切りほめたこともない。知らないうちに大きくなっていった。

大学を卒業して遠方へ就職してからは盆と暮れぐらいしか顔を見せなくなった。それでも哲司はこんなものだろうと思っていた。結婚するんだと言っつていきなりフィアンセを連れてきた時も驚かなかった。相手の女性にも興味がなかった。そういう年になったんだと思ったただけだった。

「嫁さんはどうしたんだ」

なんとなく声をかけた。いつもの散歩コースを歩いていた。

「仕事だよ」

誠二はまるで自分の散歩コースのように哲司より一步先を歩いていた。

「デパートに勤めてるんだったな」

「俺より稼いでるよ」

「頼もしいじゃないか。今のうち蓄えておくのもいい」

「それより、おやじ」

誠二の足が止まった。三叉路で迷っている。

ここでようやく哲司は誠二より先に出た。こっちへ進むんだとばかりに右へ折れると歯科医院がある。家族三人が通っていたなじみの歯医者さんだ。誠二は覚えているだろうか。

「それより、おやじ」

「なんだ」

哲司は後ろを振り返って答えた。

「この前電話で頼んだやつ、用意してくれたか」

「ん」

「あれだよあれ」

「んん」

とっさに哲司は疑った。誠二の言う「あれ」を思い出そうとする前に頭が働いた。

こいつは俺を試している。咲江から聞いて俺の物忘れを確かめてるんだ。咲江が電話で訴えたんだろう。最近物忘れが激しくて困ってるから様子を見に来てくれと。それですっ飛んできたんだ。だから手ぶらなんだ。今さつき家を出る時も咲江とアイコンタクトを取っていた。ふたりして俺を探ろうとしてるんだ。

この前の電話？

何が電話だ。何かあったらメールで知らせてくるくせに。「あれ」ってなんだよ。はっきり言えよ。頼みごとなら咲江に言った方が早いだろ。これまでもそうしてきただろ。お前たちはグルだ。グルになつて俺のことを調べようとしている。下手な芝居はよせ。

気が付けば哲司はひとりでかなり前を歩いていて。興奮してついつい早足になってしまった。

誠二が追い付いてきたので冷静さを装った。

「悪い悪い。うっかりしてた。あれだろう、あれ。おまえが来る前に用意しようとは思ってたんだが間に合わなかった。急ぐんだつたら宅配便で送ろうか」

誠二は答えずにまた哲司を追い越していった。

引越し業者から段ボール箱が送られてきた。十枚ほどがビニールひもで括られてある。何に使うんだと咲江に確かめてもふふふと笑うだけだった。

「気にしないでね」

そう言われるとますます気になる。ちよつと前に詰め込んでいた旅行カバンは膨らんだまま出発を待つかのようにリビングの目立つところに置かれてある。

咲江がビニールひもをハサミで切ろうとした時、そうだった！と哲司の体に電気が走った。

そうだったそうだった。思い出したぞ。忠雄から連絡があったんだ。

「年明けにでも温泉に行かないか」「ぜひよろしく」「奥さんも一緒にな」「分かった」「場所は任

せてくれ」「よし」「楽しみだな」「楽しみだ」

こんなやり取りをしたんだ。そのあとの咲江とのやりとりも思い出した。

この際だから思い切つて家の中の整理をしようと思うの。いいじゃないか。いらぬものは捨てるよ。そうかそうか。身軽になるのよ。俺もやろうかな。あなたはいいわ。俺にもいらぬものがたくさんあるはずだ。あなたはいいわ。どうしてだ。あなたはいいわ。

「俺も片付けるぞ」

哲司は叫んでいた。咲江からハサミを引ったくり、勢いよく段ボール箱のビニールひもを切つて段ボールをばらばらにした。そのうちの一枚の底をガムテープでとめて長方形にすると、ひよいつまみ上げてダンスの前まで持つていった。

思い出したんだ。思い出したらこつちのもんだ。俺を仲間外れにしようと思つてもそうはいかないぞ。なんだなんだ、物忘れのじじいみたいに扱いやがって。陰でこそそ動きやがって。

哲司にスイツチが入った。回りの物が見えてきた。旅行だ旅行。みんなで旅行だ。タイ、フィリピン、タイ、フィリピン。

誠二に頼まれていたものも見えてきた。赤ん坊だ赤ん坊。誠二に子供が出来るんだ。それで名前を考えて欲しいと頼まれてたんだ。名前だ名前。

ゆうた、へいた、そうた、みいた。

女の子か？

まみ、ゆみ、あみ、そみ。

哲司は笑っていた。気持ちよく笑っていた。あまりに気持ち良すぎて思い出したばかりのことをすべて忘れてしまった。

年が明けてしばらくは寒波に見舞われた。インフルエンザが流行していた。

旅行は延期。

咲江から聞かされた。忠雄が体調を崩したらしい。

嘘だろう。哲司は直感的にそう思った。インフルエンザが嘘なら旅行の延期も嘘。みんなが示し合わせて俺をのけ者にしようとしている。俺をのけ者にしてみんなで楽しもうとしているのだ。旅行へなんか行きたくなかったんだ。だいたい忠雄って奴も気に食わない。いきなりやってきて親しげに話しかけてきて強引に温泉へ誘う。厚かましい奴だ。

腹を立てているうちに目がチカチカしてきた。咲江の背中が痙攣している。痙攣しながら電波を発している。最も危険な状態だった。あなたの言うことは全く信じられませんという合図だ。

それでも哲司は声をかけた。

「誠二は元気か」

誠二のことは気になっていた。年末はひとりやってきたが年始は帰つてこなかった。どうやら予定よりかなり早く子供が生まれそうなので準備に忙しいと聞かされていた。

「元気よ」

さらつとした答えが返ってきた。

ふたりだけの年明けが過ぎようとしている。いつも通り元日には氏神さんへお参りに行って、二日はお寺さんへお参りに行って、その足で墓参りを済ませて、デパートへ寄って……買って帰って……食べたなあ……何を食べたかなあ……。

不意に足元が揺らいだ。あっと思った瞬間、哲司はリビングで尻もちをついていた。びーんと体がしびれた。立ち上がりそうするとさらに激しくしびれたのでその場にへたり込んでしまった。

咲江を呼んだ。

ばちつと音がしてリビングの扉が開く。顔を見せたのは忠雄だった。体を斜めにして近づいてくる。目を細めて、口を大きく開けて、笑いながらこっちへ向かってくる。

なぜ忠雄が、とは思わなかった。とにかく体を起こしてほしかった。

――椅子に座らせてくれないか。

「車を用意したから乗っていけよ」

――いや、体が重いんだ。手を貸してくれ。

「ゆっくりできるところだから安心しろ。下見もしてきたぞ。きれいなところだ」

頭の上から忠雄の視線が降りかかってくる。スポットライトのように、竜巻のように。

――おい誠二、椅子に座らせてくれないか、誠二、誠二。

キッチンあたりに向かってそう叫んだ。

誠二が姿を現した。

「おやじ、子供の名前を考えてくれてありがとう。まだ検討中なんだ。決まったら知らせるよ」

――いや、体が重いんだ。手を貸してくれ。

「今は落ち着くことが一番だから」

――咲江、咲江。

もう一度咲江を呼んだ。

「あなた用意は出来ましたよ。さあ行きましょう。なんにも心配いらないわ。景色もきれいだし空気もいいしふわふわしてるのよ。みんなお任せでいいの。あたしもすぐに行きますからね、さあ」

みんなが手を差し伸べてくる。しがみついている。

体が軽くなったのでようやく椅子に座れるのだと思ったらみんなの手が遠くに透けて、哲司はまた尻もちをついてしまった。